

四^しノ^の宮^{みや}琵琶^{びわ}

縁^{えん}奏^{そう}会^{かい}

弦^{げん}楽^{がく}と福^{ふく}祉^しの神^{かみ}様^{さま}
京^{きょう}都^と山^{さん}科^か四^しノ^の宮^{みや}さん
(人^{ひと}康^{やす}親^{しん}王^{おう})
を敬^{うや}ま^まう
発^{はつ}行^{ぎょう} 弦^{げん}楽^{がく}ふ^ふる^るさ^さの^の会^{かい}
小^こ谷^{たに}昌^{まさ}代^よ

四ノ宮琵琶 (平成時代)

雅楽で使う琵琶「楽琵琶」の小琵琶。かつては上流層の携帯用として使われましたが、現代雅楽では大型の琵琶のみが使われ、小琵琶の文化は断絶していません。平安貴族が奏でた琵琶の独奏文化を新たな形で再興したいと琵琶法師ゆかりの地「四ノ宮」の名を冠して四ノ宮琵琶と名付けました。雅楽の調子の一つである黄鐘調（ラドミラ）に合わせると、相対的なドレミの音階が簡単に出来ます。各種音楽に合わせた伴奏から童謡まで、誰もが自由な発想で弾ける楽器としての可能性を広げた古くて新しい琵琶です。

琵琶の各部位の名称 茶色の字はこの四ノ宮琵琶の材質



あきづき
不飽月

ほぼ十六日周期で
毎夜形を変えては元に戻る月。
楽琵琶の有する最もシンプルな十六音階で
飽きることのない日本古来の響きを奏でます。

天保辰秋(三年・一八三三年) 皇都任御用琵琶師 長田藤原憲豊作
平成二十一年十二月 東京虎ノ門 石田琵琶店
石田克佳氏により修繕され楽器としてよみがえりました。

弦の呼び名

	※こゆび 小指	※くすりゆび 無名指(薬指)	※なかゆびボウはおやゆび 中指(九親指)	※ひとせしゆび 食指(人差指)	※おさえない 解放弦
抱えると足に近い	也	ム	朴	八	上
	之	言	ヒ	七	行
	コ	美	十	下	乙
抱えると顔に近い	斗	フ	丸	工	一
	ヤシコト	センゴンビシュ	ボクヒ ジュウボウ	ハチシチゲク	ジョウ ギョウ オツ イチ



※雅楽本来の表記を
本譜面では次の漢字を
当てて代用しました。

四ノ宮琵琶の弾き方

乙 (かくばち || 搔撥)

そのなまえの絃まで、上から一絃ずつゆっくりかきならす

乙) (はやばち || 速撥)

そのなまえの絃まで、上からいっきにかきおろす

乙 (ひとつばち || 一撥)

そのなまえの絃だけをひく ※雅楽では右に一撥と記しますが、

本譜面では○字に代用しました。

乙 (かえしばち || 返撥)

そのなまえの絃から「一」の絃まで下から上部にかきあげる

乙上 (わりばち || 割撥)

上のなまえの絃までひき、ひと呼吸置いて、下の絃まで弾く

下七上 (かきすかし || 搔洗)

一番下の音まで弾く際に途中の絃を押さえかきすかす

下乙 (はずす || 弛)

上のなまえの指をはずし小さな字の余韻を聞かせる

(八 (ふせばち || 伏撥)

柱を全音押さえてそのなまえの絃までかきならす

人康親王

仁明天皇の第四皇子で、八五九年、二十八歳のとき目を煩い、山科の両羽山のふもとに御所が築かれ隠棲されました。

四ノ宮の語源といわれ、伊勢物語の「山科の禪師」は人康親王のことです。詩歌管弦に優れ、隠棲後も琵琶や笙に、心のよ
りどころを求めました。当時天台宗は、天皇家と密接な関わりをもっていたこともあり、園城寺(三井寺)の盲僧たちが長
等山から藤尾村を抜けて「山科の宮」へ出入りしていた可能性が高く、盲僧たちの声明に人康親王が琵琶を合わせたり、
琵琶を教えたりして、次第に琵琶法師がおこったと考えられます。平家物語以前にも琵琶法師が存在したのです。その後
鎌倉時代に信濃前司行長が『平家物語』を作り、東国の盲僧生仏に語らせました。平家琵琶の弾き方は楽琵琶、語りは天台
声明に通じるものがあります。親王は、当道(我が道に当たる)座の検校ら琵琶法師たちに、祖神として崇められました。

蝉丸

百人一首に詠まれている「これやいの 行くも帰るも分かれては 知るも知らぬも逢坂の関」の作者として有名です。生没

不詳とされ、謎めいたいわれを持ちます。謡曲や能の題材としてもよく知られ、物語によって、醍醐天皇の第四皇子とか、

宇多天皇の皇子、敦実親王の雑色などといわれが変わります。九州の盲僧由来『常楽院沿革史』では、八〇六年、延暦寺で

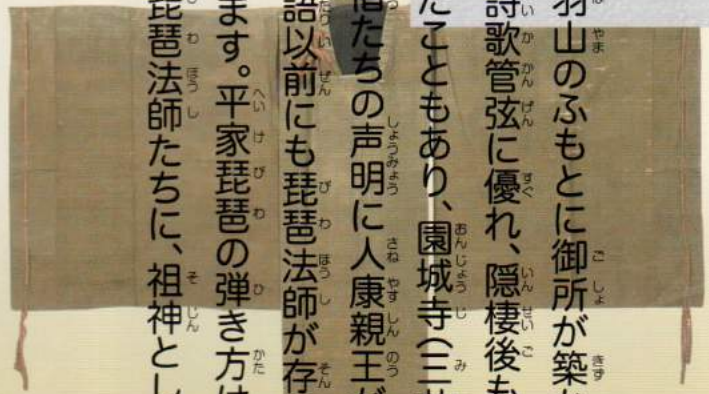
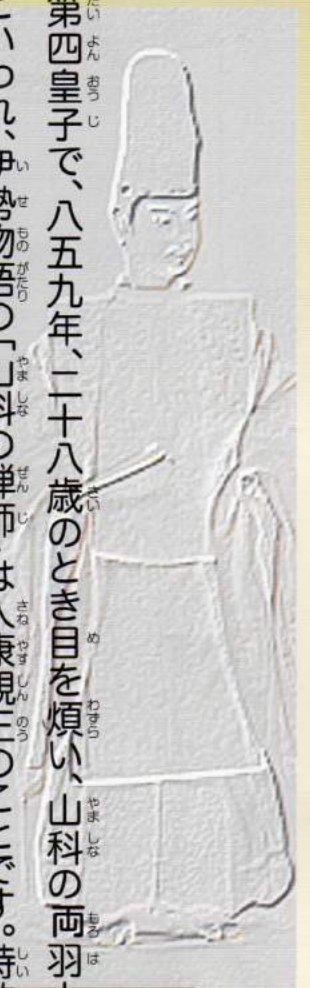
法事を行った八人の盲僧のうちの一人、満市坊が八〇八年、逢坂山に正法山妙音寺常楽院を開き、四代目住職が、蝉丸と

伝えていきます。また、今昔物語の源博雅が蝉丸に琵琶の秘曲を習うお話では「親王はこのようにお弾きになったものです」

と蝉丸が博雅に「流泉」と「啄木」を弾きます。この親王が人康親王か少し後の時代の琵琶名手貞保親王かもしれませぬ。

大津の関蝉丸神社は、古くからあった関明神に、平安初期、嵯峨天皇が上社に猿田彦、下社に豊玉姫を祀り、平安中期の

円融天皇御代に、琵琶名手として伝説化されていた蝉丸を併せて祀ったことから音曲芸能の神として信仰されています。



へいあんじだい だいよんおうじでんせつ いき
平安時代の第四皇子伝説が息づくまち四ノ宮

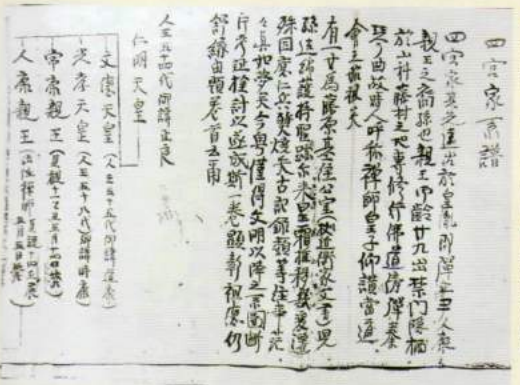
きょうとうのがしんターミナル きんじょうほうめん
京都東ICから三条方面へ
 降りてすぐの交差点



けいはんけいしんせん やましな えき
京阪京津線山科駅の
 一つ東隣の駅



いまつづ さね やすしんのう
今も続く人康親王の
 子孫である四宮家系譜



さね やすしんのう せみまるでんせつ
人康親王は蝉丸伝説の
 モデルと言われる

小倉百人一首 蝉丸
 生没不詳 謎だらけの人物！ 数多くの蝉丸伝説

此れや此の 行くも帰るも別れては 知るも知らぬも 逢坂の間

能謡曲 蝉丸
 延喜帝第四皇子 敦実親王 雑色 等々

げんがくじょうたつ しやうがいなんびょうこくかく
弦楽上達、障害難病克服
 縁結びのご利益あり！



さね やすしんのう かんれん し せき
人康親王関連史跡

しやうさい ふさく さんしやう
※詳細は付録の散策マップをご参照

もりの はしんじま
諸羽神社



とくりんあん
徳林庵



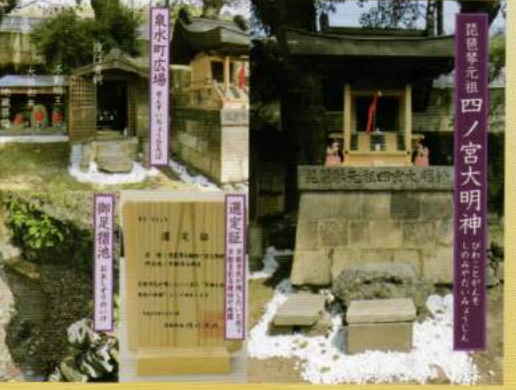
じゅうぜんじ
十禅寺



さね やすしんのう ないちやうぼ
人康親王宮内庁墓



びわこがんせしの みやだいまうじん
琵琶琴元祖四ノ宮大明神



人康親王のお父さん!

仁明天皇 (在位八三三—八五〇)

自ら作曲するほど雅楽の大成に尽力した人物。優れた作曲家や楽人が活躍し現代に通じる雅楽の源流を築いた。



藤原貞敏 (八〇七—八六七)

遣唐使として唐に渡り琵琶を学んで八三九年に帰国。楽琵琶の名手として、仁明、文徳、清和三代にわたって仕えた。貞敏が持ち帰った遣唐使献上品。

楽琵琶

玄象けんじょう、青山せいぜん

琵琶秘曲

流泉りゆうせん、啄木たくぼく、揚真操ようしんそう

人康親王 8歳のとき!

伊勢物語 第七十八段 山科の宮

むかし多賀幾子と申す女御おはしましけり うせ給ひて七七日のみわざ安祥寺にてしけり 右大将藤原常行といふ人いまそがりけり そのみわざにまうで給ひてかへさに山科の禪師の親王おはします その山科の宮に滝おとし水走らせなどしておもしろく造られたるにまうで給うて

「年ごろよそにはつかうまつれど近くはいまだつかうまつらず 今宵はここにさぶらはむ」と申し給ふ親王よろこび給うて夜の御座のまうけさせ給ふさるにかの大將出でてたばかり給ふやう

「宮仕へのはじめにただなほやはあるべき 三条の大御幸せし時紀の国の千里の浜にありける」とおもしるき石奉れりき 大御幸の後奉れりしかばある人の御曹司の前の溝にすゑたりしを島好み給ふ君なり この石を奉らむ」とのたまひて御隨身舎人して取りにつかはす いくばくもなく持て来ぬ この石きしよりは見るはまされり

「これをただに奉らばすざるなるべし」とて人々に歌よませ給ふ 右の馬の頭なりける人のをなむあをき苔をきぎみて 蒔絵のかたに この歌をつけて奉りける あかねども岩にぞかふる 色見えぬ心を見せむ よしのなければ となむよめりける



伊勢物語図色紙 第七十八段 山科の宮 (伝・俵屋宗達) 江戸時代

散策 蝉丸・伊勢物語ゆかりの地をめぐる 山科駅前8世紀前半の古墳をはじめ、地元の高校生が新説を唱える 安祥寺下寺跡や四ノ宮の史跡のご案内なども実施しています。

へい あん おうちょう てん だい そうりや ふか

▶平安王朝と天台僧侶の深いつながり

えんりやくじ じかくだい しえんにん だいごんだいぞうだいす 第3代天台座主 (794-866)

854年61歳で天台座主に。
863年秋に熱病にかかり翌年1月14日70歳で世界。
866年慈覚大師の称号を得る。

859年には人康親王の目の平癒祈願法要をしたかも!?



おんじょうじ みいでら ちしょうたい しえんにん だいごんだいぞうだいす 第5代天台座主 (814-891)

853年には唐へ留学して6年間、各地で修行。
858年多くの経巻、図像、法具を携えて日本へ帰国。
859年園城寺を再興して修験道場とする。
866年太政官から伝法の公験証明書を授与される。
868年天台座主に就任、亡くなるまで務めた。

親王が隠棲した859年、修験道を志した円珍が三井寺を再興。



きゅうしゅうもうそう そしき ぞんざい えんりやくじ

▶九州盲僧組織の存在と延暦寺

じょうじゆいん げんせいほういん 筑紫9カ国盲僧の長 (766-?)

783年17歳のとき失明し盲僧となる。
785年19歳のとき根本中堂建立の地鎮祭に招請。
789年成就院を建立、筑紫9カ国の長となる。
808年成就院が比叡山末流盲僧本寺と公認された。
817年51歳の時に法印位を与えられる。



ちくせんさつまうそうびわ かくゆいしよ こんぽんちゅうどうじちんさい おりほんにやんげんじょう こうじげんらい じらん ほうおこな 筑前・薩摩盲僧琵琶の各由緒ともに根本中堂の地鎮祭の折(般若心経)と荒神威いや地鎮の法を行ったとある。

きゅうしゅうもうそう ひえいざん いだし 九州盲僧が比叡山に居たのは確かなようですが、琵琶を弾いたかは不明。

じょうらくいん えんかくし 常楽院沿革史より 薩摩盲僧琵琶由緒

じょうらくいん まんしょういん 常楽院 満正院 逢阪山の妙音寺を創建 (8世紀後半-9世紀前半)

785年根本中堂建立の際九州盲僧8名を招請。
806年8名ともに阿闍梨位と院号を授かる。
その後4名が九州に戻り、4名が都に残り、満正院阿闍梨は逢阪山に正法山妙音寺常楽院を開山。蟬丸は常楽院の四世院主と伝えられる。

へんだ みえぬ

目の見えくあいがもやもや... 6

正倉院の雅楽倉庫 2

母が山科に山荘を建て、陰鬱の日々... 7

遣唐使船帰還 3

座主と盲僧らによる祈祷 8

唐から持ち帰ったの琵琶を献上 4

お地藏様の論し 9

人康親王琵琶を習う 5

紙芝居 四ノ宮物語

琵琶で引き語ります!

四ノ宮の史跡や雅楽史として伝わる伝説をもとに創作された人康親王が得意だった楽琵琶の目の見ええないお坊様と天台声明が出会う物語です。

四ノ宮物語 雨夜尊

~あまよのみこと~

むかーし、むかし、今から一千年以上前のこと... 1

親王の琵琶に声明を合わせたり... 楽しく過ごしました。 10

四ノ宮琵琶 独奏曲 演目

★はオリジナル曲 ☆は編曲です。

雨夜尊 (天世命) あまよのみこと — 黄鐘調 **平安独奏風** ★

四ノ宮の語源とされる仁明天皇第四皇子人康親王を慕って江戸時代の琵琶法師たちがこう呼んだそうです。琵琶法師の祖と崇められた人康親王のことを思っ作った曲です。

諸羽の月 もろのはつき — 黄鐘調 **平安独奏風** ★

琵琶は月を表す楽器として知られます。四ノ宮の諸羽山に昇る月も美しく、その情景を曲にしました。皆さんの好きな月の光景を思い浮かべてお聞きください。

五月五日 こがつつか — 黄鐘調 **法師掻鳴らし風** ★

江戸時代の琵琶法師たちは人康親王の命日(旧暦五月五日)に四ノ宮に集まり皆で琵琶を弾じて、冥福を祈ったといひます。その勇壮な演奏会の模様をイメージした曲です。

獅子丸に捧ぐ ししまるにやねぐ — 黄鐘調 **白鳳舟唄風** ★

遣唐使藤原貞敏が琵琶を持ち帰る際、嵐を鎮めるために、三面のうちの一つ「獅子丸」を海に投げ入れ難を逃れました。犠牲になった幻の琵琶の数奇な船旅を讃え唄んだ曲です。

祇園精舎 ぎおんしやうじや — 黄鐘調 **平曲小秘事** 冒頭四行☆

鎌倉時代に、信濃前司藤原行長が作ったとされる平家物語を生仏という琵琶法師に語らせたのが始まりと、「徒然草」が伝え通説となっています。天台声明の影響を多分に受けています。

祇園精舎の鐘の声 諸行無常の響きあり

沙羅双樹の花の色 盛者必衰の理をあらはす

嘉辰 かしん — 吉越調 **雅楽古典朗詠曲** ☆

冒頭は四文字熟語で知られ、この上なく毎日、毎月が幸せでめでたく、万年たっても、千回秋が来てもずっと美しく楽しい日々でありますように、との願いが込められた漢詩です。
嘉辰令月 感無極 **万歳千秋** 楽美容

幸盛 こうもり — 啄木調 **古曲 啄木&和歌長嘯** ☆

カナリアが雛に餌を与えるのを見て口で絵や書をしたためた**大石順教**が、コウモリの挿絵に添え詠んだ和歌を、藤原貞敏が伝えた平安古曲キツツキの調べに載せて長嘯します。
幸多き 身とぞ知りけり **山科の庵静かに** 漏れる月影

石庭流泉 せきていりゆうせん — 黄鐘調 **古曲 流泉&和歌長嘯** ☆

伊勢物語第七十八段に登場する藤原常行が山科の禅師に庭石を贈呈した際に、六歌仙**在原業平**が苔で刻んで書き添えた和歌を藤原貞敏が伝えた平安古曲流泉の調べに載せ長嘯します。



時絵のかたにこの歌をつけて奉りける
「飽かねども 岩にぞ換ふる 色見えぬ
心を見せむ 術のなければ」となむ詠めりける

P6
参照

悲しの宮 かなしのみや — 黄鐘調 **古曲 楊貴操&和歌長嘯** ☆

人康親王が亡くなった日の早朝に山から風がふいたとき、**小野小町**が詠んだ和歌を、藤原貞敏が伝えた平安古曲で楊貴妃が弾いたと言われる曲の調べに載せて長嘯します。

四の皇子 失せ給ひたるつとめて風吹くに **今朝**よりは
悲しの宮の山風や **また逢ふ運命**もあらじと思えば

色破歌 いろはうた — 水調 創作曲 平安端唄風和歌長嘯★

弘法大師作と言われる仮名四十八音の名作。ここでは伊勢物語第七十八段に登場した「あかねども」の和歌を女性からの秘密の恋文と捉え人康親王作の断り返歌と妄想してみます。

開かねども

歌 岩にぞ薫ふる色見えぬ

問 心を見せむ
由のなければ

目が見えなくなつて
出家して隠棲なさるのには

岩のように
固いご意思が

おありなのでしょう。

私には見えぬ
そのご本心を
どうか

お教えてください。
理由なしには
そうなさらない
でしょうから。



色は薫へと散りぬるを
返 歌 我が世誰ぞ常ならむ
有意の奥山京越えて
浅き夢見し会ひもせずん

確かに思うところはあつたのだが、
私はもう散つてしまつた身。
私の居る所は、皆のいる所とは
違ふ、普通ではないところだ。
都の宮中での在りし日から、
奥深い山を越えて

何も無いところへ来てしまつた。
禅三昧の日々で時折、
もつろつとした浅い夢の中に
都や宮中を見ることはあつても、
もはや会うつもりはない。
そう決めたのだ。

長雨 ながあめ — 黄鐘調 創作曲 平成端唄風和歌長嘯★

親王からの岩の色破歌を受け、泣き濡れる女心を春の長雨に色褪せる桜の花に例えて詠んだ和歌だと妄想。作者はご存知小野小町。年老いた風貌を嘆く解釈は和歌らしくありません。

桜の色は 鬱(移)りにけりな 悪戯(痛顔)に

吾が身世(夜)に降る 長雨(眺め)せしまに

桜花 さくらばな — 水調 創作曲 平安端唄風和歌長嘯★

小野小町「はなのいろは」の和歌と同じ情景を詠む大伴黒主の和歌。黒主も六歌仙に数えられ、悲しむ小町の歌に接して、親王の隠棲を供に惜しみ、慰める和歌を詠んだと妄想します。

春雨の降るは涙か 桜花 散るを惜しまぬ人しなれば

海松目 みるめ — 水調 創作曲 平安端唄風和歌長嘯★

伊勢物語第二十五段で在原業平の誘いを巧みに断る小野小町の和歌。一般解釈でわが身は小町ですが、見る目を失つた親王と妄想すると思ひ枯れず尼になり会いたいのには小町さん?

海松目なき わが身を浦(裏)と 知らねばや

離(枯れ)れなで 海人の 足たゆく(明日行く) 来る

逢運命関 あぶさが(か)のせき — 盤渉調 創作曲 和歌長嘯★

謎多き蟬丸の和歌。小町の海松目の歌と並べると、明日行く来る↓行くも帰るも、知らねばや↓知るも知らぬも、と親王が「逢う運命には関所ができた」と断る歌に妄想できます。

これ野狐の 行くも帰るも 別れては

知るも知らぬも 逢う運命の関(塞き)

女郎花 おみなへし — 黄鐘調 創作曲 平成端唄風和歌長嘯★

小野小町は貴公子にモテモテの気位高い女性のように言われますが、申し出を断つたのは当時の宮中女性には珍しく幼少からの一途な思い人がいたからと妄想。根拠の和歌をご紹介します。

名にし負はばなほ懐かしみ女郎花

折られにけりな 吾れ かなた手に

※和歌は幾重にも重なる複雑な意味が魅力! 和歌紹介では、妄想の解釈をわかりやすく表現するために、

原文と異なる漢字も使用しています。

山科千載記

—— 言越調

琵琶唄

★

京都山科には有名な史人の由縁地がいつぱい。そんな山科の歴史を詠み込んだオリジナル曲です。

そんな山科の歴史を詠み込んだオリジナル曲です。

水告ぐる 時のはじめり 天智ケ森の 傍らに
 陶原家 大織冠 山階精舎 興福寺
 桓武帝が 眺めせし 都定めの 東山
 清水寺と 奥の院 延鎮僧正 田村麻呂

仁明皇后の 安祥寺 東の空に さし昇る
 諸羽山の端 月影は 堂宇おぼろに 浮かばせし
 あまねく響く 琵琶の音は 心なぐさむ 四の宮
 失せししのめ 袖濡らす 小町文塚 小野浅茅

歌詠み遍照 元慶寺 樞に聞こえし 百夜道
 観音めぐる 花山院 大宅離宮 後白河
 列子高藤 夜雨契り 氷室池端 勧修寺
 連理比翼の その雛は 醍醐の帝を 産みにけり

蓮如守りし 仏国の 栄華を残す 土墨跡
 愛と誠の 内蔵助 永久に息づく 和の心
 明治浪漫を 満々と たたえし 運河 疏水切り
 ゆたにたゆたに 有り果つる 流るる水の 尊しや

いといみじくも 山科の 誇る郷に 天つ風
 千代に八千代に 六道の辻を行き交ふ 破魔波と
 東西北斗の山並みに かかる紫雲の 遙遙たらん

★作詞・作曲・編曲 小谷昌代



蓮如南殿土墨跡



宮道列子墓



僧正遍昭墓



田村麻呂墓



天智天皇陵



山科こども歌舞伎



藤原高藤墓



元慶寺



安祥寺本堂



山階寺跡碑



琵琶湖疏水



勧修寺氷室池



百夜通小町樞



諸羽の月



東山遠望



山科川



醍醐天皇陵



大宅巨石



小野小町文塚



牛尾観音

荒城の月

土井晩翠作詞・瀧廉太郎作曲

黄鐘調

唱歌 ☆

四ノ宮琵琶は雅楽の調子、黄鐘調（ラ・ド・ミ）にする、
 相対的なドレミ音階が簡単に出来ます。数ある唱歌のなかで
 も一番琵琶曲としてしっとり聞けるのがこの曲です。

春高樓の花の宴 めぐる盃かげさして
 千代の松が枝わけ出でし 昔の光今いずこ

秋陣営の霜の色 鳴きゆく雁の数見せて
 植うる剣に照りそいし 昔の光今いずこ

今荒城の夜半の月 変わらぬ光誰が為ぞ
 垣に残るはただ葛 松に歌うはただ嵐

天上影は替らねど 栄枯は移る世の姿
 写さんとてか今も尚 ああ荒城の夜半の月

故郷

高野辰之作詞・岡野貞一作曲

黄鐘調

唱歌 ☆



兎追いしかの山
 小鮒釣りしかの川
 夢は今もめぐりて
 忘れがたきふるさと
 如何にいます父母
 恙無しや友垣
 雨に風につけても
 思い出するふるさと
 志を果たして
 いつの日にか帰かえらん
 山はあおきふるさと
 水は清きふるさと

Amazing Grace

Amazing Grace,
 How sweet the sound
 That saved a wretch like me
 I once was lost,
 but now am found
 T'was blind but now I see

Through many dangers,
 toils and snares
 We have already come.
 T'was grace that brought
 us safe thus far
 And grace will lead us home,
 And...



土井晩翠作詞
 滝廉太郎作曲
 どうぞ一緒に
 唄ってください

T'was Grace that taught
 my heart to fear
 And Grace, my fears relieved
 How precious did
 that grace appear
 The hour I first believed

琵琶湖周航の歌

小口太郎作詞・吉田千秋作曲

黄鐘調

唱歌 ☆

われは湖の子 さすらいの
 旅にしあれば しみじみと
 のぼる狭霧や さざなみの
 志賀の都よ いざさらば

松は緑に 砂白き
 雄松が里の 乙女子は
 赤い樅の 森蔭に

はかない恋に 泣くとかや
 浪のまにまに 漂えば
 赤い泊火 なつかしみ

行方定めぬ 浪枕
 今日は今津か 長浜か

瑠璃の花園 珊瑚の宮
 古い伝えの 竹生島

仏の御手に いだかれて
 ねむれ乙女子 やすらけく

矢の根は 深く埋もれて
 夏草しげき 堀のあと

古城にひとり 佇めば
 比良も伊吹も 夢のごと

西国十番 長命寺
 汚れの

現世遠く 去りて
 黄金の波に いざ漕がん

語れ我が友 熱き心



弦楽ふるさとの会

TOPICS

琵琶弾き語り紙芝居「四ノ宮物語」を上演したり
地元ゆかりの琵琶を通じて、まちの歴史や魅力を
多く皆さんに伝える活動をしています。



四ノ宮さんって？

山科北部にある「四ノ宮」という地名は、平安時代、
琵琶が得意だった「人康親王」(仁明天皇の第四皇子)が
目を患ってこの地に住んだことから名づいたそうです。

四ノ宮琵琶 (平成時代～)

楽琵琶 (奈良時代～)
宮中を中心に貴族の
娯楽として普及しました。

日本古来の宮廷音楽「雅楽」で使う琵琶「楽琵琶」の小琵琶です。

かつてはお姫様やお殿様の携帯用として使われましたが、
現在は、雅楽の正式な合奏のときにだけ大型の琵琶が演奏に使われ、
小さな琵琶を用いたり、一人で弾くという文化は途絶えてしまいました。
「源氏物語絵巻」という、今から千年ほど前のお話には、
平安時代の貴族たちが膝の上にかかえて琵琶を弾く姿が描かれています。

そんなふうに分の部屋で気ままに奏でたりできる琵琶を、
琵琶とゆかりの深い山科「四ノ宮」の名を頭につけて
「四ノ宮琵琶」と呼ぶことにしました。

四本の弦の音を「低いラ」、「ド」、「ミ」、「高いラ」に合わせて弾くと、
ラ・シ・ド・レ・ミ・ファ・ソ・ラ・シ・ドの音階が簡単に出来ます。
各種音楽に合わせた伴奏から童謡まで、誰もが自由な発想で弾ける
楽器としての可能性を広げた古くて新しい琵琶です。

琵琶のいろいろ

平家琵琶
(鎌倉時代～)
信濃禅師行長が生仏と
いう僧に語らせたのが
最初といわれます。

薩摩琵琶 (室町時代～)
精神性を重んじる武士の
嗜みとして普及しました。

筑前琵琶 (明治時代～)
芸術性の高いお稽古ごと
として普及しました。

四ノ宮琵琶 (平成時代～)
平成に合ったスタイルで
楽小琵琶独奏を再興します。

平成三十年度 山科区役所 区民史跡の探訪事業



継承が途絶えかけている琵琶を
みんなで楽しく盛り上げる会

琵琶サークル

音霊杓子

おたまじやくし

メンバー愛用の琵琶の種類

- ・平安貴族が奏でた楽小琵琶
- ・筑前琵琶の絃が四本の琵琶
- ・九州盲僧ゆかりの肥後琵琶
- ・廃仏稀釈後の薩摩三絃琵琶
- ・平成スタイルの四ノ宮琵琶

弾き方の基本をマスターし、
自分好みのさまざまなシーンで使える
楽器として、奏法や活用方法を
皆で楽しみながら考え、
世に広めていく活動をしています。

平安の調べが好きな方、
ギター挫折者!?

マイナー志向者の
皆様はぜひどうぞ。

見学・体験も歓迎です!
時間 / 第2または第3土曜
午後2～5時

場所 / 安朱自治会館 (山科駅徒歩3分)
京都市山科区上野御所ノ内町46

会費 / 月1回600円 (7000円/年)
体験・見学 / 午後1時～ 予約制 無料

※必ずご連絡を。ないときもありません。

連絡先: 090-2597-3050
または下記メール宛まで (小谷昌代)